

Detection of pre-dementia cognitive impairment risk in community-dwelling older people

檜崎, 兼司

<https://doi.org/10.15017/1470513>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	檜 崎 兼 司			
論文名	Detection of pre-dementia cognitive impairment risk in community-dwelling older people (地域在住高齢者における前認知症段階の認知機能障害リスクの検出)			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	熊 谷 秋 三
	副 査	九州大学	教授	大 柿 哲 朗
	副 査	九州大学	准教授	村 木 里 志
	副 査	東フィンランド大学	講師	アタライ ムスタファ

論文審査の結果の要旨

本論文では、地域在住高齢者における前認知症段階の認知機能障害リスクマーカーとしての体力指標の利用可能性を明らかにするため、研究1：地域在住高齢者における前認知症段階の認知機能障害リスクの規定，研究2：認知症を有していない地域在住高齢者における体力指標と認知機能の関連の2点について検討が行われた。研究1においては、福岡県糟屋郡篠栗町在住で認知症を有していない地域高齢者1,848名を対象に、軽度認知機能障害スクリーニングを目的として近年開発されたモントリオール認知評価検査を実施し、得点実態を調査するとともに、同スクリーニングに用いられる標準的カットオフが、地域在住高齢者においても適用可能か検討した。その結果、標準的カットオフを地域在住高齢者に適用した場合には、軽度認知機能障害リスクが過大評価され、このカットオフを用いたスクリーニングに基づく前認知症段階の認知機能障害リスクの規定が妥当ではないことが示唆された。したがって、本検査結果に基づき作成された基準データをもとに対象集団における低認知機能を定義し、この低認知機能によって地域在住高齢者における前認知症段階の認知機能障害リスクを規定した。研究2では、篠栗町在住で認知症を有していない地域高齢者1,552名を対象に、5項目の体力指標（握力、脚伸展力、椅子立ち上がり時間、歩行速度、開眼片足立ち時間）と認知機能（全般的認知機能および研究1で規定した前認知症段階の認知機能障害リスク）の関係を、重回帰分析および多重ロジスティック回帰分析を用いて検討した。その結果、各体力指標と全般的認知機能および前認知症段階の認知機能障害リスクの間に有意な関連が認められ、さらに、性、年齢、教育歴などの交絡因子を調整した場合にもこれらの関連が同様に認められた。以上の研究結果に基づき本論文では、それぞれの体力指標が、地域在住高齢者における前認知症段階の認知機能障害リスクマーカーとしての利用可能性を有することが示唆された。地域における認知症予防施策の確立が、我が国における喫緊の公衆衛生学的課題であることを鑑みると、本論文がもたらした新規知見は、地域における認知症リスクの早期スクリーニング法を将来的に構築する際に有用であると考えられ、その点において本論文は実践的価値の高い業績であるといえる。

よって、本論文は博士（人間環境学）の学位に値するものと認める。